

水稻疎植栽培の特徴について

～ ‘キヌヒカリ’ では、移植時期が遅れると収量低下 ～

1. はじめに

水稻疎植栽培とは条間を従来の30cmのまま株間を従来の18cmより広くして植え付ける方法で、育苗箱枚数が削減できることから育苗費や作業労力の低減が期待できる。そこで、本県における水稻主要栽培品種である‘キヌヒカリ’、‘きぬむすめ’ および ‘ヒノヒカリ’ について、疎植栽培における生育特性を明らかにした。

2. 材料および方法

‘キヌヒカリ’（極早生）、‘きぬむすめ’（中生）、‘ヒノヒカリ’（晩生）を供試し、2018年6月4日および6月21日に条間30cm、株間30cm（栽植密度11.1株/m²：疎植区）および条間30cm、株間18cm（栽植密度18.5株/m²：標準区）で手植えた。施肥は窒素成分8kg/10aとなるように全量基肥施用した。調査は1区50株の2反復とした。

3. 結果

いずれの移植期、品種においても疎植区の出穂期は標準区と同日かやや遅れた。両区の成熟期は同日であった。また、疎植区の稈長、穂長は標準区と同等かやや長くなった（データ略）。

‘キヌヒカリ’の疎植区では標準区に比べて、1穂粒数は多くなるが、m²当たり穂数・粒数は少なくなり、この傾向は、6月21日移植でさらに顕著になった（表1）。その結果、疎植区の精玄米重は、6月4日移植で標準区とほぼ同程度であったが、6月21日移植では標準区対比79%になった（図1）。

‘きぬむすめ’、‘ヒノヒカリ’の疎植区では標準区に比べて、m²当たり穂数は同程度であるが、1穂粒数は多くなった。m²当たり粒数は、疎植区では、多くなるが、登熟歩合はやや下がる傾向で

あった（表1）。疎植区の精玄米重は、移植時期にかかわらず標準区とほぼ同程度であった（図1）。

全ての品種・移植時期において、疎植区と標準区の千粒重・玄米品質は同程度であった（データ略）。

表1 収量構成要素

品種名	移植日	栽植密度	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	粒数 (×100粒/m ²)	登熟歩合 (%)
キヌヒカリ	6月 4日	疎植	247.3	83.2	205.7	86.0
		標準	291.4	77.4	225.7	79.6
	6月21日	疎植	277.8	81.9	227.4	88.6
		標準	407.0	72.6	295.4	84.5
きぬむすめ	6月 4日	疎植	279.2	99.1	276.8	85.8
		標準	315.0	83.3	262.2	86.2
	6月21日	疎植	323.0	92.6	299.2	79.6
		標準	322.4	82.0	264.2	88.2
ヒノヒカリ	6月 4日	疎植	298.0	79.4	236.7	77.0
		標準	305.3	70.5	215.3	79.1
	6月21日	疎植	344.4	80.4	276.8	79.7
		標準	343.2	76.8	263.7	80.8

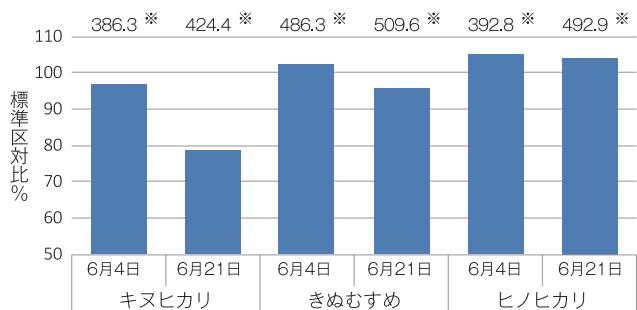


図1 疎植区の精玄米重と標準区対比

※は疎植区の精玄米重 (kg/10a)
精玄米重における重量は水分15%に補正

4. まとめ

‘きぬむすめ’、‘ヒノヒカリ’の疎植区では、移植時期が遅くなくても標準区と同程度の精玄米重が得られた。一方、‘キヌヒカリ’の疎植区では、移植時期が遅くなると茎数を確保できず、m²当たり穂数・粒数は少なくなり、精玄米重が下がったため、疎植栽培では移植時期に注意が必要である。

（栽培部 岩橋良典）